

カムサ語における場所格と類別詞の類似性について

その他のタイトル	On the Similarity of Locational Case Markers and Classifiers in Kamsa
著者	蝦名 大助
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	15-29
発行年	2019-09-30
URL	http://doi.org/10.15083/00078578

カムサ語における場所格と類別詞の類似性について*

蝦名大助

d-cbina@kobe-yamate.ac.jp

キーワード：カムサ語（コロンビア） 場所格 類別詞

要旨

カムサ語はコロンビア共和国プトゥマヨ県シブンドイで話される系統不明の言語である。カムサ語では、道具や場所など周辺の項は、名詞における格標示で示される。また、カムサ語には類別詞（接尾辞）がある。カムサ語の類別詞には派生的な性質がある。場所格接尾辞と類別詞は、形態的・統語的に類似性を示す。一方、場所格接尾辞には統語的な機能もある。すなわち、場所格接尾辞は派生的な性質と屈折的な性質を示すといえる。

1. はじめに

カムサ語（Kamsá）はコロンビア共和国プトゥマヨ（Putumayo）県シブンドイ（Sibundoy）で話される系統不明の言語である。Jamioy Muchavisoy (1999: 252) によると、話者人口は約4,000人で、うち30%程度が流暢な話者だという。文法書や辞書はまだなく、研究はさほど進んでいない。

カムサ語では、文法関係が、動詞における人称標示（接頭辞）、または名詞における格標示（接尾辞）で示される。主語・目的語は動詞における人称標示で示されるが、道具や場所などの周辺の項は名詞における格標示で示される。

カムサ語には類別詞（接尾辞）がある。ほとんどの無生物名詞は必ず類別詞を伴って現れる。このような名詞語根は拘束形式であり、類別詞を伴わずには独立した語を成せない。

(1) shekwá-tʂ 「足」

shekwa- は「足」を表わす名詞語根であるが、拘束形式であり、類別詞 *-tʂ* を伴う。*-tʂ* はやや長い物体を表わす類別詞である。

* 本論文のもととなる調査は、2015年～2018年、毎年8月～9月にかけてシブンドイで行なった。このうち2017年と2018年の調査は、文部科学省科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））「カムサ語の動詞構造の研究」（課題番号：17K18498）によって行なった。調査協力者は San Felix 地区（vereda）出身の60代女性である。調査協力者に感謝したい。

音素は以下のとおり：i, e, a, o, u, ə, p[p~ɸ], t, k, b, d, g, ts, ch[tʃ], tʂ[tʂ~tʂc], s, sh[ʃ], s[ʃ~ç], x, ʒ[ʒ], m, n, ñ[ñ], l, r, (ll[ʎ]), w, y. アクセントについてはまだわからないところがあるが、強弱アクセントと考えられる。本稿では例文中の強勢が置かれる母音にアクセント記号を付して示すことにする。また、アクセントのない語末の母音がしばしば脱落するが、脱落しているのか、そもそも母音がないのか、よくわからないこともある。

一方、場所を表す名詞語根も多くが拘束形式であるが、その中には、場所格 (locational case) 接尾辞を伴って初めて独立した語として成立するものがある。

- (2) atʂ **taban-ók** sə-n-ts-émn
 1SG 町-LOC1 1SG-DIR-PROG-住む
 「私は町 (シブンドイ) に住んでいる。」

- (3) atʂ **taban-óy** ø-sə-n-x-á¹
 1SG 町-ALL C-1SG-DIR-UM-行く
 「私は町 (シブンドイ) に行った。」

taban-「町」²は拘束形式であり、*-ok* や *-oy* が付いて初めて語として成立する。一方で、(2) から明らかなように、*-ok* には所格 (locative)、*-oy* には方向格 (allative) としての機能がある。

カムサ語の場所格接尾辞は、拘束形式に付くなどの点で類別詞との類似性を見せながら、他方では (2)(3) に見られるように統語的な機能を果たしている。先行研究では Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973) に場所格接尾辞についての記述があるが、個々の形式の意味やいくつかの接尾辞の承接関係を記述するのみである。蝦名 (2018) では、類別詞の振る舞いについて記述する上で、場所格接尾辞についても触れた。本稿では場所格接尾辞と類別詞との類似性について述べる。

2. カムサ語の格体系

カムサ語には主要な文法関係を表す格はない。主語名詞句や目的語名詞句は何も格接尾辞が付かない形で現れる。

- (4) kéʂe **t-bo-n-x-enoshmá** únga kéʂe-tem-óng
 犬 c-3>3-DIR-UM-産む 三 犬-DIM-PL
 「犬が3匹の子犬を産んだ。」

(4) では *keʂe*「犬」が主語、*unga keʂe-tem-óng*「3匹の子犬」が目的語である。それぞれ、述語動詞との文法関係を表す接尾辞は何も付いていない。動詞接頭辞 *bo-* は主語が3人称、目的語が3人称であることを標示している。すなわち、カムサ語は主要部標示型の言語である。

主語・目的語以外の周辺的な文法関係は格接尾辞によって示される。たとえば「道具」

¹ ø- はゼロ接頭辞を表わす。

² *taban-* は「町」 (pueblo) と訳されるが、シブンドイ以外の町を指すことはできない。本来カムサ族が住んでいる町がシブンドイしかなかったことが理由だと思われる。

は *-ak/-ek* によって示される。

道具格 *-ak/-ek*

- (5) *cha* *t-o-x-á* *ochansh-ák* *x-abisitá-m*
 3SG C-3SG-UM-行く 冠-INST UM-訪ねる-INF
 inɔ *pamiliá-ng*
 他の 家族-PL
 「彼（女）は冠を持って他の家族を訪ねに行った。」

格関係を表す接尾辞には他に以下のようなものがある。

随伴格 *-ptak*³

- (6) *atɕ* *ø-sə-n-x-á* *átɕ-be* *keɕe-pták*
 1SG C-1SG-DIR-UM-行く 1SG-GEN 犬-COM
 「私は私の犬と行った。」

「目的」 *-am*

- (7) *ø-sə-n-x-wa-bwe-ɕné* *bokoy-ám*
 C-1SG-DIR-UM-SHV-水-沸かす チチャ-PURP
 「チチャのために（チチャを作るために）水を沸かした。」

「原因・理由」 *-yek*

- (8) *chə-yék* *chəká* *t-mo-x-watsxínɔ*
 それ-CAUSAL そのように C-3PL-UM-学ぶ
 chəká *x-obweltaná-m* *bótskna te*
 そのように UM-踊る-INF カーニバル
 「それで、カーニバルにはそのように踊るということを彼らは学んだのだった。」

属格 *-be*

- (9) *átɕ-be* *kéɕe*
 1SG-GEN 犬
 「私の犬」

³ 道具格と随伴格の違いははっきりしない。一見すると有生物 (animate) の場合は随伴格、無生物の場合は道具格が現れるように見えるが、有生物が道具格で現れる例も見つかっている。

3. 場所格の種類

場所を表わす格には以下のものが認められる。いくつかの場所にかかわるとされる接尾辞についてはまだ分析が進んでいないため、ここでは主要な場所格を挙げる。なお本稿では、場所に関係するさまざまな格の総称として「場所格 (locational case)」という用語を用い、場所格の中でいわゆる *locative* にあたるものを「所格 (locative case)」と呼ぶことにする。動作の方向を表わす格 (「～へ」「～から」) も場所格に含まれる。

方向格 -oy

- (10) xax-óy t-mo-n-x-á-ng x-ashaká-m
 畑-ALL C-3PL-DIR-UM-行く-PL UM-収穫する-INF
 「彼らは収穫しに畑へ行った。」

所格 -ok(a) 「で」

- (11) xax-ók mamá i-n-tsobatmán⁴
 畑-LOC1 母 3SG-DIR-PROG-待つ
 「母は畑で待っている。」

所格 -iñ/-añ 「辺りで」

- (12) ba wakn-éng t-mo-xán3 shakwan-iñ
 多く 牛-PL C-3PL>3-見る 草地-LOC2
 「彼らは草地でたくさんの牛を見た。」

所格 -entş 「中で」

- (13) atş sə-n-tse-mn yebn-éntş
 1SG 1SG-DIR-PROG-いる 家-LOC3
 「私は家にいる。」

-ok(a) と -iñ/-añ の違いは、前者が「～で」と点的な捉え方をするのに対し、後者は「～辺りで」と面的な捉え方をするとところにあると思われる。また、-entş は「中で」という意味を表わすが、-ok(a) との意味的な違いがさほど感じられない場合もある。これらの場所格接尾辞の意味・機能の違いについて、まだ十分に明らかになっていないため、本稿ではいずれも所格 (locative) と呼び、それぞれの場所格接尾辞は、「所格1」、「所格2」、「所格3」のように呼

⁴ 動詞にはアスペクトに応じて2つ以上の語幹形を持つものがある。そのような動詞の多くは完結相 (perfective) か未完結相 (imperfective) かに応じて語幹が交替するが、3つの語幹形を持つものもある。また単一の語幹形しか持たないものもある。このような語幹交替について、まだ全体像が明らかになっていないため、本稿ではグロスで語幹形の違いについて示すことはしない。

んで区別することにする。

-(a)xan 「とおって」「辺りに」

- (14) xax-axán Ø-cha-n-x-á
 畑-through 1SG-FUT-DIR-UM-行く
 「私は畑を通して行くつもりだ。」

奪格 -an

奪格 -an は単独で用いられることはなく、必ず所格 -ok(a) または -entš に後接する。-iñ/-añ に -an が後接することはないようだ。

- (15) batsx-ok-án t-o-n-x-astxáng
 丘-LOC1-ABL C-3SG-DIR-UM-下る
 「彼（女）は丘から下った。」

- (16) betiye-sh-entš-án t-o-n-x-otsátš
 木-CL-LOC3-ABL C-3SG-DIR-UM-落ちる
 「彼（女）は木から落ちた。」

4. 場所格と類別詞の形態的振る舞い

4.1. ホストの性質

場所格接尾辞が付くホスト（名詞語幹）には、拘束形式のものがある。そのような名詞語幹は、単独では語を成しえず、場所格接尾辞が付いて初めて自立した語を成すことができる。たとえば、*taban-ok* 「町（シブンドイ）」、*xax-añ* 「畑」など地名や場所に関係するものがそうである。*taban-* は拘束形式であり、それだけでは自立した語を成せない。同様に *xax-* も拘束形式であり、それだけでは自立した語を成せない。

taban-ok や *xax-añ* が単一の形態素ではなく、語幹に場所格接尾辞が付いていることは、*-ok* や *-añ* の代わりに他の場所格接尾辞が付きうることから分かる。たとえば「町（シブンドイ）へ」という意味を表したい場合、*taban-oy* のように方向格接尾辞 *-oy* を付けることができる。同様に「畑へ」という意味を表したい場合には *xax-oy*、「畑で」という意味を表わしたい場合には *xax-ok* のように言うことができる。

このような名詞語幹には、地名を表すもの、「中」「外」「上のほう」など相対的な位置を表すもの（本稿では「位置詞」と呼んでおく）、その他（「畑」など）がある。位置詞の *ts-* 「中」、*shx-* 「外」なども拘束形式であり、場所格接尾辞が付いて初めて自立した語を成すことができる。

場所格接尾辞は自立形にも付く。たとえば *yebna* 「家」は自立形であり、それだけで語を成

しうるが、*yebn-oy*「家へ」、*yebn-entʂ*「家で」のように場所格接尾辞を付けることができる。場所格接尾辞は形容詞をホストにしうる。ただし見つかっている例は *-añ/-iñ* のみである。

(17) *xax-añ* *boxoxw-iñ* (蝦名 2018: 65⁵)

畑-LOC2 乾いた-LOC2

「畑が乾いている。」

(17) では形容詞語幹 *boxoxw-* に所格2 *-iñ/-añ* が付いている。なお、蝦名 (2018) では *-iñ/-añ* を類別詞として扱っていた。その後の調査で、*-iñ/-añ* には場所格的な機能があることが分かり、本稿では場所格接尾辞として扱うことにした。しかし、形容詞をホストにしうる、という点では *-iñ/-añ* は類別詞に似ている。また (17) で *-iñ/-añ* には格としての機能は見られない。

次に類別詞について検討する。カムサ語では無生物名詞の大部分が類別詞を伴って現れる。例えば、*chimal-be*「ツリートマト」、*plor-sha*「花」は、それぞれ類別詞 *-be* や *-sha* を伴って初めて自立語として成立する。すなわち無生物名詞語幹の大部分が拘束形式である。類別詞のホストが名詞語幹であるとき、そのホストはほとんどの場合拘束形式である。有生名詞語幹は多くの場合自立形であり、類別詞を伴わない (*bobonts*「少年」、*kotʂ*「豚」など)。

一方、場所格接尾辞のホスト名詞語幹は拘束形式であることもあれば自立形式であることもある。

類別詞は形容詞語幹にも付く。

(18) *kem* *chimal-bé* *tamnə-bé* (蝦名 2018: 63)

この ツリートマト-CL おいしい-CL

「このツリートマトはおいしい。」

形容詞が名詞を修飾するとき、(19) のようにその形容詞は何も接尾辞を伴わない。

(19) *tamnə* *chimal-bé*

おいしい ツリートマト

「おいしいツリートマト」

しかし形容詞が文の述語として現れるときには、類別詞を伴う。(18) では *tamnə*「おいしい」が類別詞 *-be* を伴って現れている。すなわち、形容詞はそのままでは述語になれず、類別詞を付けていわば「名詞化」することによって述語になれると考えられる。

⁵ 表記を一部修正した。また形態音韻的な解釈が変わった部分がある。

4.2. 接尾辞の位置

蝦名 (2018) では、名詞類の形態論を以下のように考えていた。

名詞語根	- 類別詞	- 数	- 格
形容詞語根	- 指小辞		

図1. 名詞類の形態論

そして、「1つの語根に類別詞と指小辞がどちらも付いたり、数と格の融合が見られることがあるなど、実際の形態論はもう少し複雑である」と述べた (p.59)。実際にこのような語順になることが多い。たとえば (20) や (21) では名詞語根に類別詞が付いたあとで、場所格接尾辞が付いている。

- (20) betiye-sh-entş-án t-o-n-x-otsátş (= (16))
 木-CL-LOC3-ABL C-3SG-DIR-UM-落ちる
 「彼 (女) は木から落ちた。」

- (21) ndəţş-be-ñ ø-sə-n-ts-a-kwe-xantşetá
 石-CL-LOC2 C-1SG-DIR-PROG-SHV-手-ぶつける
 「私は手を石にぶつけた。」

また、(22) では語根に双数接尾辞が付いたあとで、属格接尾辞が付いている。(23) では類別詞に複数接尾辞が後接している。いずれも図1に沿っている。

- (22) bobonts-át-be 「少年たち (双数) の」
 少年-DU-GEN
- (23) chimbal-bé-ng 「ツリートマト (複数) 」
 ツリートマト-CL-PL

しかし当てはまらない例も見られることがわかってきた。たとえば、「かまど」*shinza-* は拘束形式であるが、類別詞が付いた形でも場所格接尾辞が付いた形でも表わすことができる。

- (24) a. *shinza-bé* (かまど-CL)
 b. *shinzá-k* (かまど-LOC1)

(24a) は石を組んで作られるという「かまど」の形質的側面に、(24b) は調理をする場所であ

るなど、場所格的側面に注目した形だと考えられる。すなわち、類別詞が現れるのと同じ位置に場所格接尾辞が現れることがある。

また、場所格接尾辞には属格形に後接できるものがある。たとえば *-oy* は *-be* に後接し、「～のところへ」という意味を表す⁶。

- (25) *ø-psə-n-x-optsá-ng* *ngobernə-bi-óy*
C-1PL.EXCL-DIR-UM-行く-PL 長-GEN-ALL
「私たちは長のところへ行つた。」

食べ物を表わす類別詞 *-an* も属格形に後接できる。

- (26) *kotʃ-bi-án* 「豚肉」
豚-GEN-CL

すなわち、場所格接尾辞にも類別詞にも、属格接尾辞 *-be* に後接できるものがある。

以上、場所格接尾辞と類別詞の形態的振る舞いについて見てきたことをまとめると次のようになる。

i) 場所格接尾辞のホストとなる名詞語幹には拘束形式のものがある。また、類別詞のホストとなる名詞語幹は多くの場合拘束形式である。場所格接尾辞は自立形の名詞語幹にも付くが、類別詞が自立形の名詞語幹に付く例は非常に限られている。また、類別詞は形容詞語幹に付くことができる。同様に、場所格接尾辞のうち、*-iñ/-añ* は形容詞語幹に付くことができる。

ii) 類別詞と格接尾辞の承接順序は、ふつう「名詞語幹—類別詞—格」となる。ただし、類別詞と同じ位置に場所格接尾辞が現れることがある。また、場所格接尾辞には属格接尾辞に後接できるものがある。類別詞の中にも属格接尾辞に後接できるものがある。しかし「名詞語幹—属格以外の格—類別詞」という承接順にはならない。

5. 場所格と類別詞の統語的振る舞い

場所格接尾辞は、いくつかの点で統語的に格らしくない振る舞いを示す。

(a) 名詞を修飾できる

場所格形の名詞には、他の修飾語同様、名詞を修飾することができるものがある。

⁶ 地名の中にはこのような音形をしているものもある。Tamabioy などがそうである。カムサ語に由来する地名の多くは意味がわからなくなっている。スペイン人の到来以降、本来の音形から変化したものが多いようだ。

(27) eskwel-ók enówta
 学校-LOC1 同級生
 「学校の同級生」

(28) meşə-shá-ñ şekwa-shá-ng
 机-CL-LOC2 足-CL-PL
 「机の脚」

(27) で *eskwel-ok* 「学校」は場所格接尾辞の *-ok* が付いた形であり、*eskwel-* 単独では語を成しえない拘束形式である。(27) では *eskwel-ok* が *enowta* 「同級生」を修飾している。一方 (28) では *meşə-* 「机」に類別詞 *-sha* が付き、さらに場所格接尾辞 *-iñ/-añ* が付いて「足」を修飾している。形容詞が名詞を修飾する場合や (29)、属格名詞句が名詞を修飾する場合 (30) にも修飾語は被修飾名詞の直前に現れる。

(29) batşá rar
 少し 金
 「少しの金」

(30) ák-be şekwá-tş
 君-GEN 足-CL
 「君の足」

(30) で修飾語は属格形をしている。(27) や (28) で修飾語は属格形をとれない。有生名詞でなければ属格形をとれないと考えられる。

(b) 名詞文の主語または述語になれる

場所格形の名詞(句)は、名詞文の主語や述語になることができる。(a) の場合同様、このような名詞語幹は拘束形式で、場所格接尾辞が付いて初めて自立した語を成しうるものである。

(31) bəng-be taban-ók bəts taban-ók
 1PL-GEN 町-LOC1 大きい 町-LOC1
 「私たちの町(シブンドイ)は大きい町だ。」

(32) ndá-be xax-añ
 誰-GEN 畑-LOC2
 「(それは)誰の畑？」

(31) や (32) において、*taban-ok* 「町 (シブンドイ) 」や *xax-añ* 「畑」は、明らかに場所格としての機能を果たしていない。(31) では、場所格形の名詞句が文の主語および述語として、(32) では文の述語として機能している。

一方で、場所格接尾辞は格らしい振る舞いも示す。

(33) *atʂ* *taban-ók* *sə-n-ts-émn* (= (2))
 1SG 町-LOC1 1SG-DIR-PROG-住む
 「私は町 (シブンドイ) に住んでいる。」

(34) *atʂ* *taban-óy* *ø-sə-n-x-á* (= (3))
 1SG 町-ALL C-1SG-DIR-UM-行く
 「私は町 (シブンドイ) に行った。」

(33) では「住む」という述語動詞に対して、*taban-* は所格1の *-ok* で現れている。方向格 *-oy* で現れることはできない。一方、(34) では「行く」という述語動詞に対して、*taban-* は方向格 *-oy* で現れている。*-ok* や *-ents* など所格で現れることはできない。

非場所格形の名詞 (句) が、場所を表わして副詞的に用いられる例は見つかっていない。以上のことから、場所格接尾辞にはやはり格としての機能があると考えられる。

類別詞の統語的振る舞いにも、場所格と似たところがある。

(a) 名詞を修飾できる

(35) *tʂabwá-px* *boboshú-x*
 指-CL 毛-CL
 「指の毛」

(b) 名詞文の主語や述語になれる

(36) *kem* *chimbál-bé* *tamnə-bé* (= (18))
 この ツリートマト-CL おいしい-CL
 「このツリートマトはおいしい。」

(36) で *kem chimbal-be* 「このツリートマト」は名詞文の主語として現れている。述語形容詞「おいしい」は *tamnə-be* と類別詞が付いた形で現れている。

以上、場所格接尾辞と類別詞の統語的振る舞いをまとめると以下のようになる。場所格形の

名詞も類別詞形の名詞も名詞を修飾することができる。また、それぞれが名詞文の主語・述語になることができる。一方で、場所格には統語的な機能があるが、類別詞には統語的な機能は認められない。

ところで、修飾語になれたり、名詞文の主語や述語になれたりする場所格形は、それぞれの名詞語幹に対して、おおむね決まっているようである。地名を表すものなどの場合には *-ok* 形がこれに当たる (*taban-ok* 「町 (シブンドイ)」など)。*xax-* 「畑」のように、*-iñ/-añ* 形が修飾語や、名詞文の主語や述語になれるものもある。以下ではこのような場所格形を「基本形」と呼ぶことにする⁷。すなわち、*taban-* 「町」に対しては *taban-entş* などではなく *taban-ok* が基本形であり、*xax-* 「畑」に対しては *xax-ok* などではなく *xax-añ* が基本形である、ということである。

名詞1語で単独でいう場合にも、基本形で現れる。たとえば、「町 (シブンドイ)」と単独で言う場合にも *taban-ok* で現れるし⁸、「畑」と単独で言う場合にも *xax-añ* で現れる。このような名詞語幹は、語幹形を辞書形として示すのではなく、特定の場所格接尾辞が付いた形、すなわち基本形を辞書形として示すことが適切であると考えられる。

次のような例がある。

- (37) *kem* *taban-ók* *basé-ñ*
 この 町-LOC1 小さい-LOC2
 「この町は小さい。」

(37) で主語 *kem taban-ok* 「この町」は所格1 *-ok* で現れているのに対し、述語 *base-ñ* 「小さい」は所格2 *-iñ/-añ* で現れている。(37) は名詞述語文⁹であるから、主語 *taban-ok* 「町」は何ら場所格としての働きを持っていない。*taban-* は場所を表わす拘束形式であるため、何らかの場所格接尾辞を要求するとしても、場所格としての働きがないのであるから、どの場所格接尾辞で現れてもよいはずである。にもかかわらず *-ok* で現れている。このことは、*taban-* 「町」に対して *-ok* がもっとも基本的な場所格接尾辞であることの現れという、上で述べた指摘に対するさらなる証拠といえるのではないだろうか。

類別詞が付く名詞語幹の多くは拘束形式である。このような名詞語幹の大部分は、決まった類別詞しかとらない。たとえば「ボール」を表わす *balon-* は拘束形式であるが、丸いものを表わす類別詞である *-be* しか付かない。*balon-* のような名詞語幹は、辞書形として語幹形を示す

⁷ 拘束形式の場所名詞語幹であっても、基本形がないものもある。位置詞には基本形がないと考えられる。なぜなら位置詞が修飾語や、名詞文の主語または述語として現れることがないと考えられるからである。ただしこの点についてはさらなる調査が必要である。

⁸ 地名については、*taban-ok* のような *-ok* 形だけでなく、*-oy* 形も無標 (基本形) と考えることができるかもしれない。単独で言う場合に *-oy* 形も許容されるからである。傍証として、カムサ語域の地名に *-oy* 形が散見されることが挙げられる (*Sibundoy* など)。

⁹ (37) で述語形容詞 *base-* 「小さい」は所格2 *-iñ/-añ* で現れており、名詞化していると考えられる。

のではなく、類別接尾辞が付いた形 *balon-be* で示すことが適切であると考えられる。そのような意味でも、場所格接尾辞と類別詞は似ているといえる。

しかし異なるところもある。場所を表わす名詞語幹は、拘束形式であったとしても、機能に応じて(動詞との意味的な関係に応じて)さまざまな場所格形をとることが可能である。一方、類別接尾辞が付く名詞語幹の場合、複数の類別接尾辞をとることができるものもあるが、多くの名詞語幹にはある決まった1つの類別接尾辞しか付かない。

場所格接尾辞と類別詞の異同を以下にまとめる。

表1. どのホストに付くことができるか

	名詞 (拘束形式)	名詞 (自立形式)	形容詞
場所格接尾辞	○	○	△ (-iñ/-añ のみ)
類別詞	○	×	○

表2. ホストとなる名詞語幹が異なる接尾辞をとれるか

場所名詞	○ (機能に応じて異なる場所格接尾辞をとれる)
類別詞	× (多くの名詞語幹は決まった類別詞しかとれない)

表3. 統語的性質

	修飾語	名詞文の主語・述語	格としての統語的な機能
場所格形名詞	○	○	○
類別詞形名詞	○	○	×

6. まとめと今後の課題

場所格接尾辞と類別詞にはいくつかの共通点がある。形態的にみると、ホストに拘束形式のものがある、また属格接尾辞に後接できるものがある、といった振る舞いの共通性がある。統語的に見ると、場所格形名詞も類別詞形名詞も名詞文の主語や述語になれる。

蝦名 (2018) で指摘したように、カムサ語の類別詞には派生的な性質がある。1つには、形容詞 *ptseng* 「黒い」に対する *ptseng-iy* 「コーヒー」のように、語幹に類別詞が付くと意味の特殊化が起こる場合があるということ (-iy は液体を表わす類別詞)。もう1つには、派生的な性質を示す接尾辞である指小辞 *-tem* と類別詞との振る舞いに共通性があることである。いくつかの点で類別詞との共通性を示すことから、カムサ語の場所格接尾辞にも派生的な性質があるといえるのではないだろうか。

しかし、カムサ語の場所格接尾辞は統語的な機能も持つことから、場所格接尾辞には派生的な性質も屈折的な性質もある、とみることができる。

さらに、次の点を指摘できる。蝦名 (2018) では、カムサ語の名詞の大部分が類別詞クラスに分けられること、そのことから、類別詞がカムサ語文法の中で重要な役割を果たしていることを指摘した。また、Grinevald and Seifart (2004) が、ジェンダー・名詞クラスについて、文法化が進んだものからそうでないものまで連続体としてとらえることを提案している、ということについても述べた。類別詞がカムサ語文法の中で重要な役割を果たしていることから、カムサ語の類別詞を単なる派生と片付けることはできない。このことと、場所格接尾辞が派生的性質と屈折的性質の両方を示すことを考え合わせると、カムサ語の名詞形態論において、派生と屈折は連続的である、といえるのではないだろうか。(38b) のように、格と数が融合することがあることを考え合わせると、名詞形態論全体を連続的にとらえることができるかもしれない。

- (38) a *yebn-éntʃ* 「家 (単数) の中で」
 家-LOC3
- b. *yebn-enátʃ* 「家 (複数) の中で」
 家-LOC3.PL

最後に、本稿では十分扱うことのできなかつた問題について指摘しておきたい。

1 点目は、場所格形名詞が主要項になれる可能性についてである。類別詞形の名詞句は動詞文の主要項になれる。

- (39) *ø-sə-n-x-watóná* *moto-shá*
 C-1SG -DIR-UM-停める バイク-CL
 「私はバイクを停めた。」

一方、場所格形の名詞句も動詞文の主要項になれることを示唆する例がある。

- (40) *tsashx-añ* *x-enxatayá-n*
 通り-LOC2 UM-分かれる-INF
 「道が分かれる (こと) 。」

(40) は動詞に人称標示がなく定動詞ではないため文とはいえないが、調査協力者の内省によると文法的であるという。(40) では場所格形の *tsashx-añ* が主語と分析できる可能性がある。

2 点目として、奪格 *-an* が関わる例以外でも場所格接尾辞が複数連続する場合がある。*xax-axan* 「畑を通して」(畑-through) の代わりに、*xax-añ-xan* (畑-LOC2-through) ということができる。意味の違いはさほど感じられないようだ。さらに、次のように場所格接尾辞が3つ連続することもある。

蝦名 大助

- (41) tx-oy-ka-xán
山-ALL-LOC1-through
「山の道を通して」

また、(42)では少なくとも場所格接尾辞が2つ連続している。

- (42) bəta-ch-xan-skóñ
道-CL-through-till
「道まで」

しかし *-skóñ* はさらに *-skó-ñ* と分析できる可能性もある。*-sko* が「～まで」を表わす場所格接尾辞であり、さらに所格2 *-iñ/-añ* が後接しているのかもしれない。一方で、*-sko* が他の場所格接尾辞と共起せず現れる例がまだ見つかっていないことから、共時的には複合格形のようになっていて *-skó-ñ* とは分けられないのかもしれない。今後、これらの問題についてさらに検討する必要がある。

略号一覧

>: 左項が主語、右項が目的語	FUT: 未来
1: 1人称	GEN: 属格
3: 3人称	INF: 不定詞語尾
ABL: 奪格	INST: 道具格
ALL: 方向格	LOC1: 所格1
C: 完了 (completed)	LOC2: 所格2
CAUSAL: 原因格	LOC3: 所格3
CL: 類別詞	PL: 複数
COM: 随伴格	PROG: 進行相
DIM: 指小辞	PURP: 目的格
DIR: 直接情報 (direct information)	SG: 単数
DU: 双数	SHV: 語幹頭母音 (stem head vowel)
EXCL: 除外形	UM: 無標の相 (unmarked aspect)

参考文献

- 蝦名大助 (2018) 「カムサ語の類別詞と名詞分類の概要」 『東京大学言語学論集』 39 (林徹先生退職記念号) : 80-87.
- Grinevald, Colette and Frank Seifart (2004) Noun Classes in African and Amazonian Languages: Toward a Comparison. *Linguistic Typology* 8(2): 243-285.
- Jamioy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. *Lenguas Aborígenes de Colombia*, Memorias 6: 231-284. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.
- Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy, Putumayo, Colombia*. Bogotá: Instituto Lingüístico de Verano.

On the Similarity of Locational Case Markers and Classifiers in Kamsá

Daisuke EBINA

d-ebina@kobe-yamate.ac.jp

Keywords: Kamsá (Colombian indigenous language), locational case markers, classifiers

Abstract

Kamsá is a language isolate spoken in the town of Sibundoy, Putumayo Department, Colombia. In Kamsá, peripheral cases such as instrument and location are shown by nominal case markers. Kamsá also has nominal classifiers. Locational case markers and classifiers show some morphological and syntactic resemblance. The classifiers in Kamsá show some derivational properties. On the other hand, the locational case markers have syntactic functions. All of this suggests that the locational case markers in Kamsá have both derivational and inflectional properties.

(えびな・だいすけ 神戸山手大学)